

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	畳の敷からない家
Author(s)	龍野, 繁太郎
Citation	龍南, 188: 1-10
Issue date	1923-12
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8673
Right	

疊の敷からない家

龍野繁太郎

洛北の都××通りの停留所を、蒲團着て寝たと詠はれた東山をまどもに見て、右の方に乾物屋の角を曲つて歩くことのある人々は、今でもあの閑静な通りに、壯大な歌舞伎門のついた堂々たる構かまへの閑雅な家を見出すであらう。

そして、其の歌舞伎門の前には、怎麼構かまへの邸宅に相應しく風丰賤しからぬとも言ひ度ひのだが、何れかといへば、無智の野人そのまゝの頑冥さを現はした、五十の坂も疾くに越した老人が人待ちそうな様子を立つて居るのを見受けるであらう。然し、今少し注意深い觀察をなす勞を惜まない人々は、此の老人が決して人を待ち倦んでゐるのでは無いことを知るであらう。それは、困苦艱難そのまゝの數十年來の永い生活が、その唯一つの希望の緒綱が斷ち切れた爲めに崩折くづれて、而も未だに其の迷妄から覺め得ないが故に生じてくる困憊と憔悴と倦怠とに、東洋的な幻滅と諦めとが加はつた治し難いところの自失々神の態であることを感知し得ることが出来るであらう。此の老人は犇々と心に追つてくる寂滅には、或ひは既に麻痺しきつて仕舞つて、今では全然其處ことには觸手を失つてゐるのであらう。そして

其の眼差は何處を見詰めてゐることもなく彷徨してゐるのである。

此の邊にしては——幾ら京の町とは云へ壯麗過ぎる歌舞伎門の前を、少くとも三度位も通り過ぎる経験を持つ人々は、必ず一度位は長い竿竹を持った老人が、門の側の倉の樋をつゝいてゐるのを見るであらう。此の老人は殆ど晝間中の仕事として、彼が取つても取つても作る雀の巢を取り除けてゐるのである。若しも、機嫌のいゝ若い男が、『お爺さん、とてものこと世の中の雀を塵みじんにしたら怎うですか?』と挨拶しても、其の老人は、『此の豚奴!』とでも言ふ様な眼付を鋭がらし乍らも、矢張り次の瞬間には、つと笑つて、巢を取り拂ふ手を休め様とはしないであらう。其程までにこの巢を取り除ける仕事は、初めは五月蠅いことだつたに違ひなからうけれども、今では恰好の暇つぶしだと彼には思はれてゐるのであらう。

だが、此の老人の驚く可き程の執拗さは——實際何れの點から見ても、此の老人が如何なればこそ斯くまでもその家を大事にして居るのかは驚愕に値することだが——今一つの彼の擽まない勞作に依ても窺ひ知ることが出來よう。或ひは人は怎麼こと言へば頭から馬鹿にしてかゝるかも知れないけれど、此の老人は一年三百六十五日の間、それこそ雨が降り風が吹かうと、又は雪が散らうとも一夜だつて休むことなくきつちりと眞夜中の二時頃になると、拍子木を撃ち鳴し乍ら家の周圍を廻るのであつた。彼が他郷の人であるに違ひないことは一見して分ることだが、それにしても、近所の者だつて行きすりに挨拶を交はして通り過ぎる者は殆どないのであつた。

それは春のことであつた。

何だか憐う、さびれた銀屏風のかげからでも吹き起つてくる様な、京の街特有の身を刺す枯風も立たなくなつて、智恩院や本願寺あたりの古刹の、がらんど、うな仄暗におはします如來の金色にも、幾分温かみを含んで光る様に感じられて來る春の頃であつた。其の頃私は家を捜すことを——相當大きな構の家でも好いとのことであつたが——頼まれてゐたので、或る日曜の朝、暇な學生の私は金閣寺に近い下宿を出かけたのであつた。

私は、一勢に柔かく蕾をつけた圓山の櫻の名木を見に廻はつた。あたりにはぼつ／＼とお上りさん達の影も見えたが、未だ日曜とは云へ少し早めだつたので、薰黛粉装の美姫は逍遙してゐなかつた。

私は、何處を怎う行つて何方に向いて曲がつたり歩いたり爲たかは好く覺えてゐないので、兎に角「偶然」にも××通りの停留所に出て、先の歌舞伎門構の家のある通りに出たことにして置かうと思ふ。

近くの小物屋で訊いてみると、其の家には誰も住まつてはゐないが、唯老人が二人居るらしいとのことであつた。私は、勿論餘り壯大な家構なので借りるなんて氣は起さないのであつたが、元來家を、特に斯んな閑雅な家を見るのが好きだつた私は、一應見て置くのも好いだらうと不躰な好奇心を抱いて行つてみることにした。

小物屋の人が言つた通りに、最初老人はなか／＼見せて呉れ様とはしなかつた。私は色々願つてみてやつと許して貰へたのであつた。

老人は、唯一通り雜に見せる積りであつたらしいが、私が餘り念入りに而も好い加減な賞讃の言葉も

發せずに、熱心に見てゐたことが多少老人の氣持ちを和げたらしかつた。

私は家の模様を詳細に渡つて説明することは避ける積りだが、家は何の部屋も障子がびつたりと立てゝあつた。私は序に部屋の中も見せて戴けまいかと願つた。私は言ふことを忘れてゐたが、私は何んな者で何んな用件で來たのかは老人に一應話して置いたのであつた。

老人は嚴として私の願ひを受け入れては呉れない様であつた。私は禮を失しない程度に於て執拗に懇願した。と云ふのは、私は此の老人が此の家主で有ることは勿論だが、此の家に就いては屹度何か譯があるに違ないと思つたからである。

此の無口な老人は、聽て私の顔を凝視し乍ら言ひ出した。

「私は、あなたが大變いゝ人の様に思ふから話します。私は唯あなたの申出をお斷りすれば、事はそれ切りなのです。何も今更初めてのあなたに對して斯麼こと話す必要がありますけれども、何うか私のこの話を訊いて下さつてから部屋を見て下さい。」

私は事が餘りに唐突過ぎるので、一寸の間打ち据ゑられた氣持ちがしたが、老人と向ひ合つて、温い清和な春の光を浴び乍ら庭石に腰掛けた。

老人は、刻み煙草を吹かし乍らぼつり／＼と語り出した。私は此の老人の物語に批判がましいことは言ふまいと思ふ。老人の言葉に従へば、それは虐げられた者の反逆的な企圖かも知れないが、私には、斯麼氣持ちを老人に抱かせたものが何であるか明瞭に分らないから。

老人の話は慙うだつた。

私は二十の時分比叡山の……そうです今も有るかないか知りませんが、西側の中腹にあつた△△寺といふ小さな寺の番人をして居たのです。勿論伴僧と云ふ名義だつたのですがお經の一句も知らない私は唯々寺の掃除をするのが其の日の仕事だつたのです。あなたは何うして其處寺の伴僧なんか成つたのかと訝かられるに違ひないと思ひますが、そんな事を一々話してゐたら際限がありませんからね。で兎に角何かの都合でその寺の伴僧だつたことに致して置きませう。

それは丁度夏でした。佛教大學の學生の方が勉強に来てゐられたので、何時も獨りでゐた私はゆつゝ、りと出掛けることが出来たのです。或る日寺に歸ると、茶の間にその學生の方と一人の女が話して居ました。その女は私の……今で言へば戀人だつたのです。私は又その女との仲を説明せねばならぬ立場になりましたが、此れも管々しくなりますから、女は丹波の篠山の或る大工の娘であつた位にして貰ひませうか。あゝ、それから私の郷里は京都から餘り遠くない里なのです。私の両親は賤貧な水呑み百姓でした。何うして其の娘と知り合ひになつたかも、あなた方の様な學問をなされた方に話したところで詰つた話でもありますまいし、それに老ひ果てた私達から見ると、戀なんて愚なことの様氣が致しますから援きにします。

兎に角私は、その學生の方の骨折りで一廉の伴僧に成りました。でも私が篠山の親元から逃げて來た女と家を持つたところで、あの寺の上り高ではとても食つては行けなかつたからなのです。私は毎日學生の方からお經を教りました。その學生の方は眞實に私達の爲めに骨を折つて下さいました。

此れだけは言つて置きますが、私がその寺に逃げて來たのは世間から虐待められた揚句の果であつた

のです。私は自分の意氣地なさが齒痒かつたのですが、私には何とも出来ませんでした。私には一人の兄がありますが――彼に就いては後で言ひますが――兄は私よりも強かつたのでせう、郷里に残つて何か働いてゐたらしいのです。何うも話が概念的になつてあなたには飽き足りないと思ひますが、先に言ひました通り冗漫でもあるし、それに私の亡くなつた兩親のことも必然話さねばならぬ様になるので、そうすれば私の心腑を又もや二重にして繰り返さねばなりませんから許して貰ひます。

世間から打ちのめされて反抗に燃えてゐた私も、その女と一緒になつてからは、多少輝かしい希望をも抱き乍ら山を下りました。そくて或る町の寺に居ましたが、それも束の間でその女は不時に死んで仕舞ひました。斯うなると私は矢張り獨りで居れない弱い男だと云ふことが分るので。女と一緒にゐる時は、世間の蔑視も壓迫も多少忍び得ることが出来たのですが、女が亡くなると、支へる棒を失つた様に世間の壓迫の重さに耐へかねて直ちに壓し潰され様とするのです。私は此ではいけないぞと臍を固めてもみました。然し生來意志の餘り強くない私の力には、世間といふものが餘りに重過ぎるものゝ様に思はれてなりませんでした。先きにも言ひました通りに、私が世間から虐待されて人並に頭を上げ得ないのは、兩親が私達に残した悲しむべき消し得ない負擔と一文無しの貧困なのです。何度も繰り返す様ですが、此の兩親のことは、あなたを信じないから言へ無いのではなくて、私自身の苦痛のために言へないのです。生涯誰にだつて言へないのです。と、ぼけ、櫻も春になれば斯うした長閑な日和には咲けるから好いのです。如何かに早く出し過ぎた芽が摘み取られ様とも、やがては一勢に芽が萌え出づる春があるから好いのです。だが私には未來永劫その春が來ない様に思へたのです。私は彈力を失つた護謨の様

にばさ／＼した氣持ちで如何とも仕様のない有様でした。私には反逆的な刺々しさと、石の様な冷たい寂しさなどが常に襲ひかゝつてゐたのです。それでも私は生きて行かねばならなかつたのです。

それから私は處々方々の工夫にも何度もありました。或る田舎の軌道の車掌にもなりました。そして其の時などは、毎日學校に通學する生意氣な中學生にまでも嘲笑の的にされました。又或る時は斯んなことも有りました。私がK市の工場を出されて、少しの金を頼りにM市の炭坑に行く積りで徒歩で旅行してゐた時でした。或る所でM市に行くと言ふ私と同じ境遇にゐたらしい三人の男と一緒にゐたのです。其の男共は皆金が無いと言つたので、私はパンを買つては分配してやりました。私達と一緒にゐた晩は、M市から五里程手前のOといふ所の或る小屋にこつそりと忍び込んで寢ましたが、明る朝私は其の男共が私の金を持ち逃げしてゐたのを知りました。私は實際其の時隨分腹が立ちました。だが仕方無いことですから、それにM市までは五里程なので其の日一粒の飯も食はずに歩きました。

今から思ふ斯んなことは淡い夢見る様な心地がすぐですが、然し其の頃の私には、全てが文字通りに虐待そのものだと思へなかつたのです。私は人間といふ人間が悉く嫌で嫌でなりませんでした。私が何處でゝも落着かなかつたのは、私が意志は弱い癖して反抗心に燃ゐてゐた勢かも知れません。だが私は長たらく私の漂浪者時代を話すのを止ませう。唯私が如何程迄に人間に對して嫌惡心と反逆心とを抱いて居たかを知つて下さるれば宜しいのです。

其の頃私も卅近くになつてゐました。私は他人の間で働くにつけ次第に故郷が懐かしくなり出しました。然し以前のことを思ふと矢張り歸郷する氣にはなれませんでした。だが故郷への執着心は益々募つ

てくるばかりでした。私は子供の様に故郷に歸り度くなつて或る時は泣いた程でした。私は突然故郷の『に或る夜こつそりと歸りました。そして兄の家で其の夜は語り明してしまひました。兄は「今に見ろ！」』とい氣を少しも屈せずには働き續けてゐたそうです。私は兄の前に頭が下りました。そして私達は誓ひました。「屹度村の奴等を、否世間の奴等を見返してやるぞ！」と決心しました。私達には、何んなことを爲して見返してやるかといふ確とした企てはなかつたのです。唯莫然とした反抗に燃れた希望が有る様に思へたのです。私達は金で虐待められましたから、先づ金で見返してやれと思ひました。丁度炭坑の坑夫達が金を貯へて立派な簞笥を買ふのを誇る様な氣持ちに似てゐるかも知れませんが、私達は先づ立派な家を建てる覺悟でゐました。あなた方は馬鹿な考へだと思はれることでせうが、無智な私達には外面だけしか見なかつたのです。

私達が、それからと云ふものは如何に勢付いて働いたかは、とてもあなた方の様に良い家庭に育ちになつた方は想像もつきますまい。私達は私達の希望が好いか悪いか知りもせず、又考へ様ども爲ませんでした。唯私達は反抗其のものであり、世間の奴共を見返してさへやれば好いのだと思ひ詰めてゐたのでした。斯うした生活が殆ど三十年も續きました。今から思ふと、其も全くの夢です。吾ながらあんなに働けたものだと思ふことすらある位なのです。食物だつて無論碌すつぽなもの食つてゐませんでした。

私達は、貯へた全ての金を以て此の家を建て始めました。此の家の一本一本の柱も、屋根の瓦の一枚々々も、斯うして庭に轉がつてゐる一つ一つの石も、全て是皆私達の血を漉ぎかけたものゝ結晶に外な

らないのです。全てに私達の涙と汗とが溶け込んでゐるに違ひないのです。そう思ふと私は、此の家と私の身体と一緒に溶け合ふ程の愛着心を感じるのです。私達は二人共妻子を持ちませんでした。だから此の家は私達の妻子でゝあるのです。私達は此の家に他人が指一本でも觸れることを許しません。家が建ち上るにつれて、私達の望みはいや増しに満されて行きました。磨かれた一本の柱は、それだけの望みを満して呉れるのでした。私達は歡喜の極に進んで居ました。

だが私達は、此の家が全部終るといふ最後の瞬間に於て、息も止まる程、眼も眩む位に打ち潰されて仕舞ひました。

老人は此の時深い嘆息をもらして話を切つた。昂奮した顔は赤味を帯びて眼は異様に煌々きらきらと光つてゐた。暫くすると再び重たげな調子で始めた。

此の家は、未だに一枚の畳すら敷かれてはゐないのです。

何故そんなに見境も無く使つたのかと思はれるかも知れませんが、家が仕上つて、いざ勘定して支拂ひをする段になると、急に殖ふいたもの等が出て来て、何うしても畳代が無いのです。そして勿論畳屋は貸しては呉れません。私達は、畳を全部敷き詰めて見たいと幾度となく思ひめぐらしたことでせう。そして敷き詰めた畳のことを想像して見ては、微笑を如何に嬉しくたゞよはしたことであろう。然しそれも淡い想像に過ぎませんでした。

でも、門の側の倉の二階に病氣で寝てゐる兄——兄は昨年から急激に弱り果て、仕舞ひました。中風だそうです——のことを思ふと、如何にしても一度は疊を敷き詰めて寝せてやらねばならぬと思ひます。萬一兄があゝの二階で死んで仕舞つたらと思ふと居ても立つても居られないのです。私は狂ひそうになるのです。

……然し思ふて見ますに、私達は私達自身をも顧みねばなくなつて來るのを思ひ當ります。だが、私達には冷靜な理性も穩當な判斷も、今では疾くに消え失せて仕舞つてゐる様です。未だ世間への燃ゆる様な反抗心は依然として残つてゐるのです。私達が變つた方向に心を向くるまでには、多くの時日が中間に狭まつてゐる様です。

老人の話は終つた。

私達の腰掛けてゐる庭も大分日影が傾いた様であつた。私は老人に何と言つて好いのやら分らなかつた。

實際此の老人は、門側の倉の二階に唯二人で住んでゐるのであつた。

私は今で斯うして凝と坐り乍ら、あの家のことを思ふと、年老ひた人が撃ち鳴す拍子木の音が聞こえて來る様な氣がしてならない。